

複文発話の構文的特徴と聞き手の言語的反応との関わり : ケド, タラ, カラを中心に

著者	永田 良太
雑誌名	日本語科学
巻	25
ページ	5-22
発行年	2009-04-24
URL	http://doi.org/10.15084/00002211

複文発話の構文的特徴と聞き手の言語的反応との関わり

——ケド、タラ、カラを中心に——

永田 良太
(鳴門教育大学)

キーワード

従属節、主節、文の階層構造、あいづち

要 旨

複文とあいづちをはじめとする聞き手の言語的反応に関しては、文（発話）を産出する話し手と文（発話）を理解する聞き手の観点からそれぞれ研究が行われ、その構文的特徴や談話における機能がこれまで明らかにされてきた。本稿においては、そこでの研究成果に基づきつつ、談話の中で観察することにより、次の2点を明らかにした。

I. 従属節末と主節末とでは聞き手の言語的反応が異なる。

II. 従属節末における聞き手の言語的反応は従属節の従属性と密接に関わる。

従属節末に比べて、主節末では情報の充足を前提とした聞き手の言語的反応が多く生起する。また、同じ従属節末でありながら、B類のタラに比べてC類のケドやカラの従属節末には多くのあいづちが見られ、その中でも理解や共感を示すあいづちが特徴的に見られる。これには複文という文の形やC類の従属節が持つ情報の完結性という特徴が関わっており、複文発話に対する聞き手の言語的反応は発話の構文的特徴と密接に関わると考えられる。

1. はじめに

会話における発話の聞き手は、話し手から与えられた情報を単に受け取っているのみではない。堀口（1997）が指摘するように、聞き手は相手の発話に対して様々な言語的・非言語的な反応を行っている。聞き手の言語的反応については、これまで「あいづち」を中心として研究が行われ、そこで用いられる形式（水谷 1984；小宮 1986；陳 2000 など）や生起するタイミング（杉藤 1993；水谷 2001 など）が明らかにされている。また、その働きとしては、「聞いている、わかったということを示す（堀口 1997）」ほか、相手の発話の促進（水谷 1988）や会話におけるターンの交替（大浜 2006）にも関わるということが指摘されている。

これらの研究においては、直前の発話内容を聞き手がどのように認識するかということと聞き手の言語的反応との関わりに主に注目されてきたが、本稿においては、そのような発話内容が表される際の文の形、即ち、発話の構文的な特徴と聞き手の言語的反応との関わりについて明らかにする。具体的には、会話の中で複文が産出された時の聞き手の言語的反応について分析する。分析の観点は、1) 従属節末と主節末における聞き手の言語的反応の差異と、2) 従属節の種類に

よる聞き手の言語的反応の差異という2点である。

複文は、「雨が降ったけど、運動会は行われた」のように、従属節と主節によって構成される。そこでは、二つの命題が接続助詞によって結ばれることで、新たな事態が表される。先の例で言えば、従属節で表される“雨が降った”という命題（前件）と主節で表される“運動会は行われた”という命題（後件）が接続助詞「けど」によって結ばれることで、“雨が降ったけど、運動会は行われた”という新たな事態が表される。前件と後件のそれぞれの命題は独立しているが、接続助詞で結合されることで、両者には相互依存的な関係が生じることになる。

このような構文的特徴を持つ複文の従属節末には、あいづちをはじめとする聞き手からの言語的反応が見られやすいことが指摘されている（水谷 2001）。また、主節末は文（発話）の切れ目と重なるため、聞き手の言語的反応が生起しやすい場所であると考えられる。では、二つの命題が統合されていく際の聞き手の言語的反応とそれらが統合された後の聞き手の言語的反応には、どのような違いが見られるのであろうか。

また、これ以外にも、聞き手の言語的反応に影響すると考えられる複文の構文的特徴として、主節に対する従属節の従属度の違いが挙げられる。第5節で述べるように、接続助詞の種類によって、従属節と主節の結びつきの度合いが異なることが指摘されているが、このような構文的特徴と聞き手の言語的反応との関係についても、本稿において考察を行う。

複文に関する研究とあいづちを中心とした聞き手の言語的反応に関する研究は、これまで文（発話）を産出する話し手と文（発話）を理解する聞き手のそれぞれの観点から行われてきたが、本稿においては、そこで明らかにされてきたそれぞれの研究成果に基づきつつ、実際の談話の中で両者がどのように関わり合うかを明らかにする。

なお、益岡・田窪（1992）が指摘するように、従属節は様々な言語形式によって構築されるが、本稿では、第5節で具体的に述べるように、国立国語研究所（1951）および南（1974, 1993）に挙げられている接続助詞によって構築される従属節を対象とする。

2. 発話に対する聞き手の反応

会話における聞き手は、発話を理解するに際して、様々な反応や働きかけを話し手に対して積極的に行っており、話し手の発話はそのような聞き手からの働きかけに支えられている（堀口 1997）。本節においては、先行研究に基づきつつ、会話中の発話に対する聞き手の反応についてまとめる。

会話中の発話に対する聞き手の反応は非言語的なものと言語的なものとに大別される。非言語的な反応には、うなずきなどの身体的反応や笑いがある（堀口 1997）。言語的な反応には、実質的な発話とあいづち的な発話とがある。杉戸（1987）によれば、談話における発話は実質的な発話とあいづち的な発話とに分類される。実質的な発話とは「なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話」であり、あいづち的な発話とはそのような働きかけがなく、応答詞や感動詞のように実質的な内容を表さない言語形式や繰り返しの発話などである（杉戸 1987：88）。会話中の発話に対す

る聞き手の発話もこのいずれかに分類されると考えられる。後述するように、本稿で分析した談話においても、実質的な発話とあいづち的な発話のいずれもが聞き手の発話に見られた。

言語的反応のうちのあいづち的な発話に関して、堀口（1997）は生起する位置によって二つに分類している。一つは「はい」、「えー」、「うん」などのように、句の切れ目であれば自由に打たれるものであり、もう一つは「そうですね」や「なるほど」などのように、情報が充足された時に打たれるあいづちである。前者には「はい」、「はー」や「え」、「えー」といった話し手の感情を直接的に表す感声的表現（小宮 1986）が用いられ、後者には「なるほど」や「ほんと」といった元来は概念を表す形式である概念的表現（小宮 1986）および「そう」、「そうですね」などが用いられる。

本稿で分析を行う従属節末と主節末における聞き手の言語行動には情報の完結性・非完結性が関与すると考えられるため、本稿ではこのようにあいづちが生起する位置の自由度に注目してあいづち的な発話を分類し、前者を「自由型」、後者を「制約型」と呼ぶ。但し、同じ「自由型」もしくは「制約型」のあいづちであっても、形式の違いによって談話の中で果たす役割が異なるため、この点にも適宜言及しつつ、以下においては考察を行う。また、堀口（1988）で言われるところの「相づち詞」には、杉戸（1987）の「あいづち的発話」に含まれる「繰り返し」や「言い換え」は含まれていないが、本稿においてはこれらも広義の「あいづち」として考える。その際、「言い換え」も発話内容としてはそれ以前の発話の繰り返しであると考え、「繰り返し」として一括して扱う。「繰り返し」は生起する位置の自由度は高いが、実質的な内容を表すという点で自由型のあいづちとは異なる。また、そこで表される内容はそれ以前の発話をなぞったものであり、判断や説明などといった聞き手に対する積極的な働きかけを有しない点で実質的発話とも異なる。

これらの、自由型のあいづち、制約型のあいづち、繰り返しの発話を本稿では堀口（1988）に基づいて「あいづち詞」と呼ぶ。また、堀口（1997）における「先取り」型の発話も資料中に4例見られたが、本稿においてはこれらを実質的発話に含めて考察を行う。以上のことをまとめると、会話中の発話に対する聞き手の反応は次のように分類される。

①非言語的反応

- a. 身体的反応
- b. 笑い

②言語的反応

- a. あいづち詞
 - 1. 自由型
 - 2. 制約型
 - 3. 繰り返し
- b. 実質的発話

本稿では、このうちの②「言語的反応」に着目し、複文発話の構文的特徴との関わりを明らかにするが、同じく発話に対する反応であっても、a.「あいづち詞」とb.「実質的発話」とでは当該

発話との関係が異なる。「あいづち詞」は当該発話に対する反応として用いられるものであるのに対して、「実質的発話」は、当該発話とは無関係に、新たなトピックを導入する際にも用いられる。このように、会話中の発話に対する言語的反応には、当該発話との関わりを前提にするもの（「あいづち詞」）と必ずしも前提にしないもの（「実質的発話」）とがある。本稿においては、このうちの「あいづち詞」を中心に、複文発話の構文的特点が聞き手の言語的反応にどのように影響するかについて明らかにする。

3. 分析資料と考察対象

本稿で分析資料として用いたのは2000年から2001年にかけて広島大学で採取された12の自由談話である。参加者は22歳から30歳までの大学院生もしくは大学職員であり、それぞれ面識のない相手と30分程度個室で会話してもらったものである¹。会話はテープレコーダーに録音された。会話のトピックについては特に指定されず、時間がきたら適当に会話を終結させて部屋を出るよう片方の参加者に指示が与えられた。

また、本稿で考察対象とする複文は、常に[従属節+主節]という形で談話中に現れるわけではない。主節を伴わずに用いられる場合や（国立国語研究所 1960）、発話の途中で聞き手にターンが奪われた結果、主節が見られない場合、さらには[従属節+従属節+主節]のように、文中に従属節が2つ以上含まれる場合も見られる。本稿においては、従属節末と主節末、さらには従属節の類型による聞き手の言語的反応の異同という観点から分析を行うため、これらの例は考察対象から除外し、談話中に見られた[従属節+主節]という形をとる発話のみを考察対象とする。

なお、国立国語研究所（1960）や丸山（1996）で指摘されるように、話しことばでは文の様々な要素が省略される。本談話資料中にも「大学1年生からアルバイトをやっているから、3年目。」のように、主節の述語的要素が省略された発話が見られたが、本稿ではこのようなものも主節として考える。また、先に述べたように、本稿で対象とする接続助詞の中には、主節を伴わずに終助詞的に用いられるものもあるが、[A 接続助詞 B]という発話の連鎖のBを主節と見るか（[A 接続助詞, B]）新たな文と見るか（[A 接続助詞. B]）に関して、本稿ではAとBの意味的關係および文脈から判断した。

4. 従属節末と主節末における聞き手の言語的反応の比較

国立国語研究所（1951）および南（1974, 1993）に挙げられている接続助詞のうち、今回の談話資料中には15種類、合計689の接続助詞による複文発話が見られた。具体的な形式および形式別の出現数については次節で述べることとし、本節ではまず従属節末と主節末という文構造上の違いによる聞き手の言語的反応の差異について明らかにする。

4.1. 従属節末と主節末における言語的反応の有無

まずは、従属節末と主節末における聞き手の言語的反応の有無について、その割合を示したも

のが図1である²。なお、図中の数字は言語的反応の有無の数を表す。以下の図2～9においても同様に、割合をグラフで表し、出現数を数字で示す。また、野口・片桐・伝(2000)や榎本(2007)が指摘するように、ある発話に対する聞き手の言語的反応は発話が休止・終了する以前から生じる場合もあれば、発話が休止・終了後、間をおいて生じる場合もある。但し、従属節末や発話末であることを予測させる接続助詞、助動詞、終助詞など(榎本 2003)が聞き手に知覚されてから、それに対する反応が生起するまでには発話潜時があることをふまえると(藤原・正木 1998 参照)、発話途中に見られる聞き手の反応に関しては、従属節末や主節末の各要素に対する反応であるかどうかを同定することが困難である。同じく、発話が休止・終了後、間をおいて生じる聞き手の反応に関しても、従属節末や主節末の各要素との関わりを同定することが困難である。そこで、本稿では、野口・片桐・伝(2000)にもとづき、聞き手の反応が集中的に見られた従属節末および主節末後 500msc 以内に生じた言語的反応について分析する³。

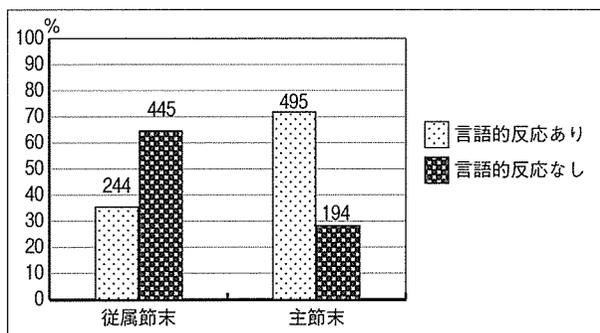


図1 従属節末と主節末における言語的反応の有無

図1から、従属節末と主節末とで、聞き手の言語的反応の生起に差があることが分かる。従属節末においては聞き手の言語的反応が見られないことが多いが、主節末においては何らかの言語的反応が生起することが多い。

先に述べたように、複文においては二つの命題が接続助詞によって結ばれる。即ち、接続助詞は本来的な統語機能として、前件と後件とを前提としており、聞き手は前件が接続助詞を伴って提示された場合には、その後、後件が提示されることを期待(予測)すると考えられる。図1に見られるような従属節における聞き手の言語的反応の少なさは、このような文構造上の特徴と関わるものであろう。即ち、文構造上、従属節の後には主節が提示されることが期待(予測)されるために、言語的反応のうち、情報が充足された時に打たれる制約型のあいづちや実質的発話が生じたりすることは少ないと考えられる。以下においては、この点について、図1の「言語的反応あり」の部分に注目して考察を行う。

4.2 従属節末と主節末における言語的反応の種類

先に見た図1の「言語的反応あり」の部分について、その内訳を示したものが次の図2である。

なお、談話中には「あー、そうですね」や「へー、いつですか?口頭試問」のように、自由型のあいづちと制約型のあいづちもしくは実質的発話が組み合わされたものも見られた。これらの発話は、生起位置の自由度に関して言えば、後部要素の特徴を有していると考えられるため、本稿ではこれらの発話をそれぞれ「制約型」、「実質的発話」として扱う。

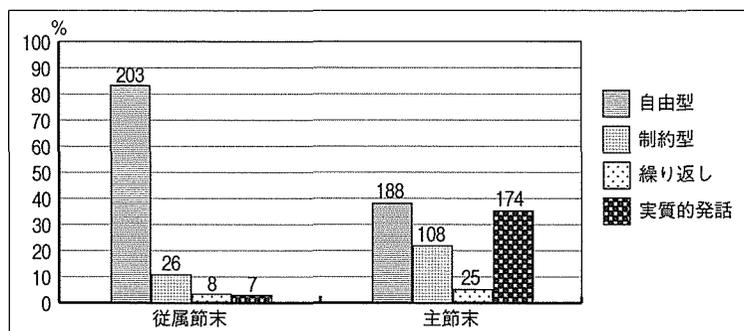


図2 従属節末と主節末における言語的反応の種類および出現数

図2から、従属節末と主節末とで、聞き手の言語的反応の種類に差があることが分かる。従属節末ではあいづち詞、特に自由型のあいづちが多く、主節末では自由型のあいづちと実質的発話が多く見られる。図1で見たように、従属節末では聞き手からの言語的反応が見られないことが多いが、そこで見られる言語的反応のほとんどが自由型のあいづちであり、情報が充足された時に打たれる制約型のあいづちや実質的発話は主節末に比べてあまり見られない。これは、前件の命題のみでは情報として充足されないという聞き手の認識を表すものであろう。聞き手からのこのような働きかけは、その後の相手の発話を促すことにつながると考えられるが、同じく自由型のあいづちであっても、形式によって談話中での働きが異なるため、その内訳について4.3節で検討する。

ここで、従属節末と同様、談話中であいづちの発話が生起しやすい環境である間投助詞（メイナード 1987）「ネ」の後に見られる言語的反応について調べてみると、今回の談話資料中には256の間投助詞「ネ」が見られ、そこでは51の聞き手の言語的反応が見られた⁴。その内訳は図3の通りである。なお、間投助詞は文中や文末など、文の各種成分に自由に付くことが出来るが（梅原 1989）、ここでは文の途中に見られたもののみを扱う。また、聞き手からの言語的反応の認定に際しては、先に述べた従属節末、主節末と同様の基準で行った。

図3を見ると、自由型のあいづちが多く、この点については従属節末と同様である。今回、対象とした間投助詞「ネ」の後も統語的には不完全であり、それのみでは聞き手にとって情報が充足されないために、制約型のあいづちがあまり見られないのであろう。このように、間投助詞「ネ」の後に見られる聞き手の言語的反応の種類に関しては、従属節末と同じ傾向が見られるが、ここで、聞き手の言語的反応が生起する割合に着目すると、従属節末では図1で見たように689の従属節末に対して244（35.4%）の言語的反応が見られたのに対して、間投助詞「ネ」の

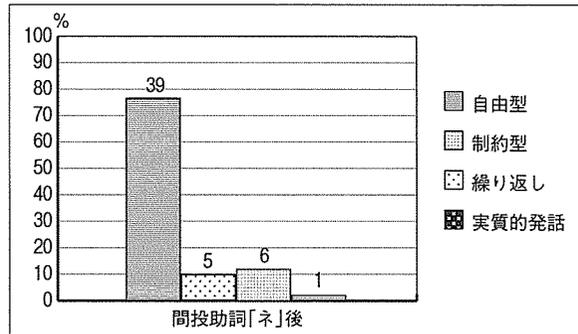


図3 間投助詞「ネ」の後における言語的反応の種類および出現数

後では 256 に対して 51 (19.9%) と低いことが分かる。これは従属節が様々な性格を持つ接続助詞によって構築されていることと関係すると考えられるが、この点については第5節で考察を行う。

4.3. 従属節末と主節末における自由型あいづちの比較

図2から、従属節末、主節末ともに自由型のあいづちの出現率が最も高いことが分かるが、以下においてはこの自由型のあいづちに注目して、あいづちの種類と形式という観点から両者の違いについて分析する。

先に述べたように、自由型のあいづちは句の切れ目であれば自由に打たれるが、そこには様々な形式が見られ、それぞれの形式に応じた働きを会話の中で果たしている。従属節末と主節末に見られた自由型のあいづちのうち、出現数が上位5位の語は以下の通りである。なお、同じ形式であっても、イントネーションの違いによって、談話中で果たす役割は異なると考えられる。そこで本稿では、松田(1988)にもとづき、上昇調、下降調、平板調の3種を区別し、それぞれ[↑]、[↓]、[→]で表記する。また、()内の数字は従属節末と主節末にそれぞれ見られた自由型あいづちの総数に占める各形式の割合(%)を表す。

従属節末 (203 例中) : ①うん[↓](42.4), ②あー[↓](20.7), ③えー[↓](6.4),
④はい[↓](5.9), ④へー[→](5.9)

主節末 (188 例中) : ①あー[↓](27.1), ②うん[↓](21.8), ③へー[→](9.6),
④うーん[↓](6.4), ⑤えー[↓](5.3), ⑤うんうん[↓](5.3)

上の結果から、従属節末と主節末に見られた自由型のあいづちには違いがあることが分かる。どちらにおいても「うん[↓]」と「あー[↓]」が上位2語を占めるという点は共通するが、その出現割合は異なり、従属節末では「うん[↓]」の出現する割合が最も高い。松田(1988)によれば、「うん[↓]」は「聞いていることを伝える」、「話についていっていることを伝える」という働きを持つ⁵。同様の働きを持つ「はい[↓]」も従属節末にのみ見られる。一方、主節末に

おいては「理解したことを伝える」働きをする「あー[↓]」の出現割合が最も高い。また、主節末にのみ見られる「うーん[↓]」は松田(1988)で指摘される「曖昧な同意」や「否定的な気持ちや疑い」を表すが、そのためには情報の理解が前提とされる。このように、従属節末と主節末に見られた自由型のあいづちには種類および機能面において違いが見られる。

また、同じ種類のあいづちが用いられていても、「単独型-反復型」という形式的な違いが見られる場合もある。談話資料中に見られた自由型のあいづちには「うん[↓]」のように単独型で用いられるものもあれば、「うんうん[↓]」のように反復型で用いられるものもある。従属節末と主節末に見られた自由型あいづちの種類と出現数について、それぞれ「単独型-反復型」という観点からまとめたものが図4と図5である。

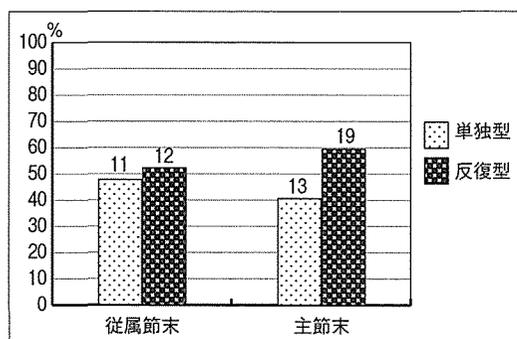


図4 従属節末と主節末における自由型あいづちの種類 (単独型-反復型)

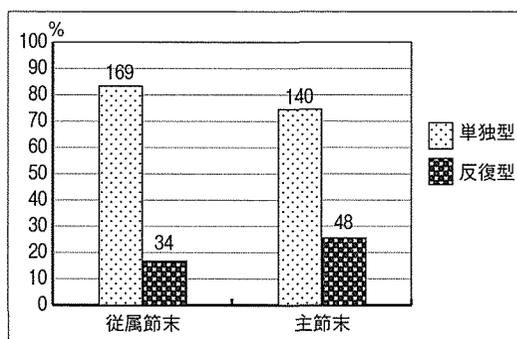


図5 従属節末と主節末における自由型あいづちの出現数 (単独型-反復型)

図4を見ると、主節末においては従属節末に比べて多くの種類の反復型あいづちが見られる傾向がある。また、出現数に関しても同様の傾向が見られ、主節末においてはより多くの反復型あいづちが見られることが図5から分かる。このように、「単独型-反復型」という観点で従属節末と主節末の自由型あいづちを分析した結果、主節末の方が多種類の反復型あいづちが多数見られる傾向があることが分かった。反復型のあいづちは単独型のあいづちに比べて、理解や共感を表す度合いが強いと考えられるが、このようなあいづちが従属節末よりも主節末に多く見られるということは、先に述べた情報の充足性に加えて、従属節と主節の二つの命題間に存在する「従-主」という情報的価値関係が聞き手に認識されていることを示すものであろう。

以上、本節においては従属節末と主節末に見られる聞き手の言語的反応について分析してきたが、上に見たように、従属節末と主節末のそれぞれに見られる聞き手の言語的反応の有無および反応の形式は複文という文構造上の特徴を反映していると考えられる。

5. 接続助詞別の比較

これまで従属節末と主節末における聞き手の言語的反応について、全体的な特徴を明らかにしたが、本節においては、個々の形式に注目して、その特徴を具体的に見ていく。先に述べたよ

うに、今回の談話資料中には15種類、合計689の接続助詞による複文発話が見られた。その種類および出現数の内訳は以下の通りである。なお、()内の数字は出現数を表す。

ケド (218), タラ (158), カラ (120), テ (35), ノテ (34), バ (29), ト (28), テモ (27), ナガラ (11), シ (10), ニ (8), ノニ (7), モノノ (2), ナラ (1), タッテ (1)

このように、談話中の接続助詞の出現数には偏りが見られる。そこで、以下においては談話中に多く見られたケド⁶、タラ、カラという3形式を中心として考察を行い、他の形式についても適宜言及する。なお、前節において、従属節末と主節末とでは聞き手の言語的反応の違いが見られることが明らかになったため、以下においては従属節末と主節末というそれぞれの観点から、各形式の特徴について考えることにする。

5.1. 従属節末における言語的反応の比較

まず、ケド、タラ、カラの従属節末における、聞き手の言語的反応の有無についてまとめたものが図6である。

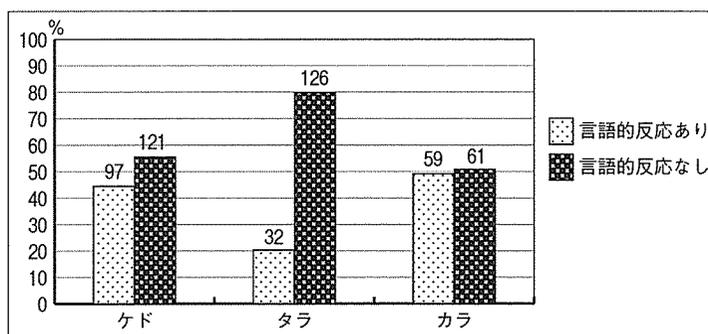


図6 従属節末における言語的反応の有無 (3形式)

図6を見ると、ケドやカラと異なり、タラによる従属節末においては聞き手の言語的反応が顕著に少ないことが分かる。後述するように、ケドやカラの従属節末に見られた言語的反応の大半が自由型のあいづちであった。水谷(2001)では、ケドやカラの従属節末にはあいづちが見られやすいと指摘されるが、上記の結果はこのような指摘を支持するものである。但し、そこに見られるあいづちの種類や何故、それらの接続助詞の後にあいづちが見られやすいかについては水谷(2001)では触れられていない。以下においてはこの点について考察を行う。

ここで、それぞれの具体例を挙げると、ケドやカラの従属節末においては、例(1)、(2)のような聞き手からのあいづちの発話が半数近くに見られたのに対して、タラの従属節末においては、例(3)のように、聞き手の言語的反応が見られないものが多く見られた⁷。

(1) <大学院生活についての話題>

A : 大学院ですか /

楽しいですよ。 /

B : あー /

A : うん /

B : いいことです /

A : うん /

大変ですよ、でも。 /

B : 大変 /

学部ん時にさぼってたっていうのもあるんですけど

(A : [ちょっと大変に感じますね、今は。 /
うーん [↓])

A : えー、[専門が] 歴史とかだったら結構大変なんじゃないですか? /

(2) <帰国児童に対する支援についての話題>

A : 日本に帰ってくると /

: うん

A : えーと公立の学校に行きますよね

(B : [今だと普通に。 /
うんうん [↓])

B : うん /

A : でも普通の公立の学校にそういう体制が整って、整ってるとは言えないから

(B : [問題なんで
あー [↓])

(B : [しょうね。 /
あーそうやね)

(3) <結婚の年齢についての話題>

A : 大学行ってない友達とかは早かったりするんですよ。 /

B : うんうん /

A : どうみても大学院行ったら 30 ぐらいなるんかなとか思ったりしますよね。 /

B : うーん /

思いますよね、やっぱり /

このように、同じ従属節末であっても、接続助詞の種類によって聞き手の言語的反応の有無に違いが見られる。では、この違いは何に起因するものであろうか。ここで、タラとカラ、ケドを区別するものとして、南(1974, 1993)が指摘する「文の階層構造」という観点から考えてみたい。

南(1974, 1993)は従属句⁸を構成する要素という観点から分類を行い、従属句をA類、B類、C類の3種類に分類した。A類の従属句は内部に現れる要素が最も限定されており、C類の従属

句はその制約が最も緩い。例えば、A類の従属句を構成する「ツツ」は主格の格助詞や「～ナイ」、「～マス」などを句の中に含むことが出来ないが、B類の従属句である「ノニ」はこれらの要素を含むことが出来る。但し、B類の従属句には提題助詞や「ダロウ」といったモダリティ要素は含まれない。C類の従属句はこれらの要素およびA類、B類に含まれる全ての要素を含むことが出来る。このように、構成要素の制約が最も緩いC類の従属句は、主節への従属度が最も低く、「もっともふつうの文に近い」とされる。また、このような従属度の違いから、C類の従属節は談話内で独立して終助詞的に用いられることも多い。

南(1974, 1993)によれば、タラはB類の従属句に分類され、ケドとカラはC類の従属句に分類されるが、図6に見られる結果はこのような従属句の特徴を反映したものであると考えられる。即ち、主節への従属度が高いB類の従属句に比べて、ケドやカラの場合には、あいづちという言語的手段によって、自らはターンを取る意思がないことを明示したり(Schegloff 1982)、相手からの発話を促したりする(水谷 1988)必要性が高いと考えられる。

ここで、参考までに、談話中に見られた他の接続助詞について見ると、A類の接続助詞である「ナガラ(継続)」と「テ①」⁹のいずれの従属節末においても聞き手からの言語的反応があまり見られないことが分かった。「言語的反応あり」の割合はそれぞれ27.3%(11例中3例)と0%(2例中0例)であった。

また、B類の接続助詞のうち、「ノデ」、「テ③」以外の接続助詞の従属節末においても、聞き手からの言語的反応があまり見られないことが分かった。それぞれの従属節末における「言語的反応あり」の割合は、「テ②」(21例中4例, 19%)、「バ」(29例中5例, 17.2%)、「ト」(28例中3例, 10.7%)、「テモ」(27例中3例, 11.1%)、「ニ」(8例中0例, 0%)、「ノニ」(7例中1例, 14.3%)、「モノノ」(2例中0例, 0%)、「ナラ」(1例中0例, 0%)、「タッテ」(1例中0例, 0%)である。なお、「ノデ」に関しては「言語的反応あり」の割合が55.9%(34例中19例)、「テ③」に関しては60%(10例中6例)であった。

これに対して、C類に分類される「シ」と「テ④」の従属節末には、ほとんどの場合において、聞き手からの言語的反応が見られた。「言語的反応あり」の割合はそれぞれ90%(10例中9例)と100%(2例中2例)であった。

発話が継続するか否かという判断には文脈的要因も関わるため、出現数が少なかった各類の他の接続助詞とともに今後さらに検討する必要があるが、上記の結果をふまえると、言語的反応の生起に関して、C類とA、B類との間には異なる傾向があると考えられる。

日本語の接続助詞が談話中でターンの継続や終結に関わる働きをすることはTanaka(1999)においても指摘されているが、そこには、主節に対する従属度の違いという発話の構文の特徴が密接に関わることが上記の結果から示唆される。前節において、統語的には同じく後続要素の提示が期待できる環境でありながら、間投助詞「ネ」の後よりも、従属節末の方が聞き手の言語的反応が生起する割合が高いことを見たが、これは上に見たようなC類の接続助詞によって構築される従属節の影響によるものであろう。

これまでは文の階層構造と聞き手の言語的反応の有無との関係について明らかにしたが、次

に、言語的反応の種類およびあいづちの形式の側面から考えてみたい。ケド、タラ、カラの従属節末における聞き手の言語的反応の種類および出現数をまとめたものが図7である。

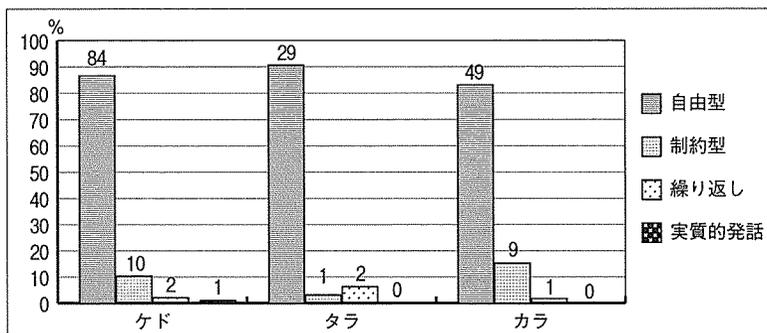


図7 従属節末における言語的反応の種類および出現数 (3形式)

図7から、3者に共通して自由型のあいづちが高い割合で出現することが分かる。但し、そこに見られる自由型あいづちの形式を見ると、違いが認められる。ケド、タラ、カラの従属節末に見られた自由型あいづちの上位5語およびそれぞれに見られた自由型あいづちの総数に占める割合(%)は以下の通りである。

- ケド(84例中)：①うん[↓](39.3)，②あー[↓](13.1)，③へー[→](7.1)，④はー[↓](6.0)，
④はい[↓](6.0)
- タラ(29例中)：①うん[↓](41.4)，②あー[↓](20.7)，③はい[↓](13.8)，④えー[↓](6.9)，
④え[↓](6.9)
- カラ(49例中)：①うん[↓](36.7)，②あー[↓](20.4)，③えー[↓](6.1)，③へー[→](6.1)，
③うんうん[↓](6.1)

これを見ると、ケド、タラ、カラの3形式に共通して、「話についていっている」あるいは「理解している」ことを示す「うん[↓]」、「あー[↓]」という形式が高い割合で見られることが分かる。この点で大きな違いは見られないが、その他のあいづちに目を向けると、ケドやカラには理解を示す「へー[→]」、「はー[↓]」や、理解や共感を表す度合いが強いと考えられる「うんうん[↓]」のような反復型のあいづちが用いられる傾向がある。一方、タラの場合には、「はい[↓]」のように「聞いている」、「話についていっている」ことを示すあいづちの割合がケドやカラよりも高い。

次に、自由型あいづちについて、「単独型-反復型」という形式的な側面から見てみる。出現数を見ると、ケドの従属節末においては84例のうち18例(21.4%)が反復型のあいづちであった。カラの従属節末においては49例中の8例(16.3%)が反復型のあいづちであった。一方、タラの従属節末においては反復型あいづちの出現数が少なくなる傾向が見られ、タラの従属節末

に見られた29例の自由型あいづちのうち、3例(10.3%)が反復型のあいづちであった。

また、種類の面に関しても同様の傾向が見られた。ケドの従属節末における18種類の自由型あいづちのうち、9種類(50.0%)が反復型のあいづちであった。カラの従属節末においては12種類の自由型あいづちが見られたが、そのうちの5種類(41.7%)が反復型のあいづちであった。これに対して、タラの従属節末においては自由型あいづちに占める反復型あいづちの割合が低くなる傾向が見られ、タラの従属節末に見られた8種類の自由型あいづちのうち、反復型は3種類(37.5%)であった。このように「単独型-反復型」という形式的な側面においても、タラに比べてケドやカラの従属節末においては反復型のあいづちが多く見られる傾向があることが分かった。

南(1993)では、文は「描叙」、「判断」、「提出」、「表出」の四つの段階から成り、A類の従属句は「描叙」、B類の従属句は「判断」、C類の従属句は「提出」の各段階に関わるとされる。南(1993)によれば、描叙段階で描かれた「ものごと」が判断段階において、「肯定/否定」や「とりたて」など、様々な限定を受け、提出段階で提示される。このような指摘を踏まえれば、文が構成される途中の段階に相当するA類やB類の従属句に比べて、C類の従属句は情報としての完結度が高いと考えられる。上に見たように、B類のタラに比べて、C類のケドやカラの従属節末には理解を示すあいづちや主節末に見られる反復型のあいづちが多く見られる傾向があるが、このような違いは、C類の従属節の情報としての完結度の高さといづち形式が関連することを示すものであろう。但し、上記の結果から、同じC類の接続助詞であっても、ケドとカラの間には違いがある可能性が示唆された。この点については今後、検討する必要がある。

以上見てきたように、B類のタラによって構成される従属節末に比べて、C類のケドやカラによって構成される従属節末においては多くのあいづち的発話が見られ、その種類も異なる。他のB類、C類の接続助詞にも同様の傾向が見られるが、このような違いには、C類の従属節が持つ情報の完結性という構文的な特徴が関わると考えられる。

5.2. 主節末における言語的反応の比較

次に、ケド、タラ、カラの3形式によって構築される複文の主節末における聞き手の言語的反応の有無を調べたものが図8である。なお、これらの主節末と比較するために、複文以外の発話末¹⁰について調べた結果も併せて示す。

図8を見ると、先に見た従属節末とは異なり、主節末においては「タラ(B類)-ケド・カラ(C類)」といった従属節の類型による違いは見られないことが分かる。また、複文以外の発話末の反応と比べると、主節末における聞き手の言語的反応の有無は複文という文の形とも関係しないと言える。

では、そこに見られる言語的反応に関してはどうか。ケド、タラ、カラの主節末および複文以外の発話末における聞き手の言語的反応の種類および出現数を調べたものが図9である。

図9が示すように、言語的反応の種類および出現数に関しても「タラ(B類)-ケド・カラ(C

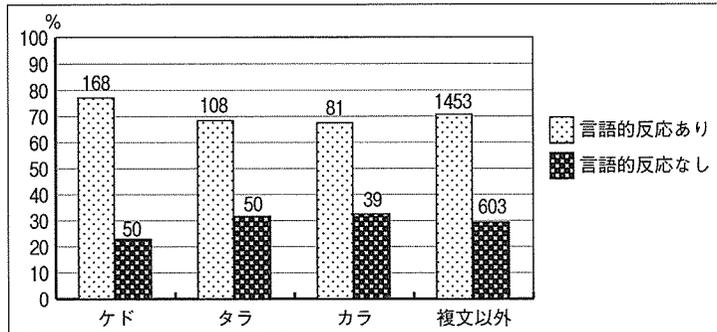


図8 発話末における言語的反応の有無（3形式の主節末と複文以外の発話末）

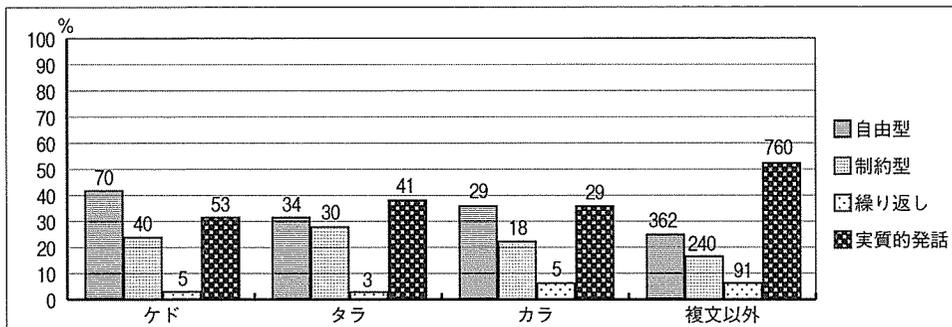


図9 発話末における言語的反応の種類および出現数（3形式の主節末と複文以外の発話末）

類)」といった従属節の類型による違いは見られないが、3形式と複文以外の主節末とは違いが見られる。具体的には、複文以外の発話末に比べて3形式による複文末には自由型あいづちが多く見られる。

では、具体的な形式に関してはどうか。3形式ともに出現頻度が高い自由型あいづちについて、出現頻度が高かったものを挙げると次のようになる。なお、()内の数字はそれぞれの主節末に見られた自由型あいづちの総数に占める各形式の割合(%)を表す。

- ケド (70例中) : ①あー[↓](31.4), ②うん[↓](15.7), ③へー[→](10.0),
 ④うんうん[↓](7.1), ⑤ふーん[→](5.7), ⑤えー[↓](5.7),
 ⑤はー[↓](5.7)
- タラ (34例中) : ①うん[↓](29.4), ②あー[↓](20.6), ③へー[→](8.8),
 ③うんうん[↓](8.8), ⑤ふーん[→](8.8)
- カラ (29例中) : ①うん[↓](24.1), ①あー[↓](24.1), ③うん[↓](13.8),
 ③えー[↓](13.8), ⑤へー[→](6.9)

これを見ると、出現頻度の高い自由型あいづちの形式に関して、ケドは同じC類のカラより

もB類のタラとの間に共通点が多い。但し、上位2語を占める「うん[↓]」と「あー[↓]」の割合に関して両者は異なる。このように、自由型あいづちの形式的側面に関して、「タラ(B類) - ケド・カラ(C類)」といった従属節の種類による違いは見られない。

以上、見てきたように、主節末における聞き手の言語的反応に関しては、従属節の種類による違いは見られない。聞き手からの言語的反応の有無に関しては、複文以外の発話末と共通の特徴が見られるが、そこで見られるあいづちの種類および出現数に関しては、複文以外の発話末とは異なる特徴が見られた。この点について、今後は、接続助詞の違いにも留意しつつ、複文という形を持つ発話が談話中でどのような働きをするかを検討する必要がある。

6. まとめと今後の課題

本稿においては、談話中の複文発話に対する聞き手の言語的反応に着目することで、発話の構文的特徴と聞き手の言語的反応が密接に関わっていることを明らかにした。本稿で明らかにしたのは次の2点である。

- I. 従属節末と主節末とでは聞き手の言語的反応が異なる。
- II. 従属節末における聞き手の言語的反応は従属節の従属度と密接に関わる。

本稿で明らかにしたように、従属節末と主節末という違いや従属度の違いに応じて、(反応の有無も含めた)様々な聞き手の反応が見られる。特に、あいづちに関しては、文の構文的特徴に応じた使用が見られた。ここから、聞き手は複文発話を理解するに際して、情報の充足・未充足やターン取得の意思の有無などを「あいづち」という言語的手段で話し手に伝達していると考えられる。また、話し手もそのような聞き手からの働きかけに支えられて自らの発話を行っているとすれば(堀口 1997)、談話における複文発話は話し手によって一方的に産出されるのではなく、構文的特徴にもとづいた話し手と聞き手の相互作用の中で成立していると言えよう。

最後に、今回はケド、タラ、カラという3形式を中心に考察を行ったが、今後は他の接続助詞についても分析を行い、本稿の結論を検証する必要がある。また、A類とB類の違いやB類の中でも、ノデヤテ③のように、言語的反応の出現頻度に関してC類と類似の傾向を示すものが見られるのは何故かという問題についても、本稿では明らかにすることが出来なかった。これらの点について、今後さらに資料を追加して考察を行い、発話の構文的特徴と聞き手の言語的反応の関わりについて明らかにしていきたい。さらに、本稿においては発話に対する聞き手の反応のうち、言語的な側面に注目して考察を行ったが、聞き手の非言語的反応、文脈的要因、ポーズとの関わりなどについても分析を行い、発話の構文的特徴と聞き手の反応との関わりについて、包括的な考察を行う必要がある。

注

- 1 談話資料の内訳は大学院生同士の会話が11組、職員同士の会話が1組であり、同性同士および異性ととの会話がそれぞれ6組ずつである(男-男:3組、女-女:3組、男-女:6組)。
- 2 被調査者毎に集計を行い比較したところ、いずれの被調査者にも概ね同じ傾向が見られ、特定

の個人の結果が全体の傾向に強く影響しているということにはなかった。そこで本稿では、全ての被調査者の結果をまとめて集計し、それに基づき考察を行う。これ以降の分析についても全て同様の確認を行った。

- 3 認定に際しては、録音されたデータを電子化したものを、音声分析ソフト（「SUGI Speech Analyzer」, 杉藤美代子監修・著, ANIMO）を用いて分析した。
- 4 談話中には、「ケドネ」や「タラネ」など、接続助詞とともに間投助詞「ネ」が用いられたものが76例見られたが、これらは複文数および間投助詞数のいずれからも除外した。
- 5 表記に関して、松田（1988）では「ン」と「ウン」が区別されるが、談話中で両者を厳密に区別することは難しいと思われるため、本稿では一括して「うん」と表記する。
- 6 本稿においては、ケドと同様の接続機能を持つケドモ（2例）、ケレド（1例）、ケレドモ（1例）、ガ（2例）についても考察対象に含める。
- 7 談話資料中の表記はメイナード（1993）にもとづくものである。「/」、「。」、「?」はそれぞれ「発話の区切れ」、「発話の終わり」、「疑問のイントネーション」を表し、[は発話が同時に生じたことを表す。なお、例（1）の } } 内の語は、便宜上、意味を補ったものである。
- 8 南（1974, 1993）の「従属句」には、本稿で扱う接続助詞のほかにも、用言の連用形や形式名詞で終わるものも含まれる。
- 9 南（1974, 1993）によれば、接続助詞テは従属句の構成要素によって①～④に分類される。なお、テ②とテ③はともにB類の接続助詞として同じ構成要素をとることができるが、「理由・原因」を表すか、「継起的または並列的な動作・状態」を表すかによって両者は区別される。
- 10 「複文以外の発話」とは、本稿で分析対象とする接続助詞および間投助詞「ネ」を含む発話を除くものであり、言語的反応の認定は4.1節で述べた基準で行った。

参考文献

- 梅原恭則（1989）「助詞の構文的機能」北原保雄（編）『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体（上）』, 302-326, 明治書院
- 榎本美香（2003）「会話の聞き手はいつ話し始めるか：日本語の話者交替規則は過ぎ去った完結点に遡及して適用される」『認知科学』10, 291-303, 日本認知科学会
- 榎本美香（2007）「発話末要素の認知と相互作用上の位置づけ」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『文と発話3：時間の中の文と発話』, 203-229, ひつじ書房
- 大浜るい子（2006）『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社
- 国立国語研究所（1951）『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版
- 国立国語研究所（1960）『国立国語研究所報告18 話しことばの文型（1）－対話資料による研究－』秀英出版
- 小宮千鶴子（1986）「相づち使用の実態－出現傾向とその周辺－」『語学教育研究論叢』3, 43-62, 大東文化大学語学教育研究所
- 杉戸清樹（1987）「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相－座談資料の分析－』, 68-106, 三省堂
- 杉藤美代子（1993）「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』12(4), 11-20, 明治書院

- 陳姿菁 (2000) 「日本語の談話におけるあいづちの類型とその仕組み」『日本語教育』108, 24-33, 日本語教育学会
- 野口広彰・片桐恭弘・伝康晴 (2000) 「あいづち挿入行動の実験的分析」『言語・音声理解と対話処理』28, 7-12, 人工知能学会
- 藤原彰彦・正木信夫 (1998) 「調音位置および調音様式の発話潜時への影響」『信学技報』SP97-88, 1-8, 電子情報通信学会
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64, 13-26, 日本語教育学会
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版
- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育学-あいづちに関連して-」『日本語学』7(13), 59-66, 明治書院
- 丸山直子 (1996) 「話しことばにおける文」『日本語学』12(9), 50-59, 明治書院
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態-あいづちの分析-」金田一春彦博士古稀記念論文集編集委員会(編)『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻 言語学編』, 261-279, 三省堂
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7(13), 4-11, 明治書院
- 水谷信子 (2001) 「あいづちとポーズの心理学」『言語』30(7), 46-51, 大修館書店
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- メイナード・K・泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『言語』16(11), 88-92, 大修館書店
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- Schegloff, E.A. (1982) Discourse as an interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences, In Tannen, D. (ed.) *Analyzing Discourse: Text and Talk*, 71-93, Georgetown University Press.
- Tanaka, H. (1999) *Turn-Taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction*, John Benjamins.

謝 辞

本稿をまとめるに際して、査読者ならびに編集委員の方々より多くのご助言を賜りました。心より感謝申し上げます。

(投稿受理日：2008年2月7日)

(最終原稿受理日：2008年12月11日)

永田 良太 (ながた りょうた)

鳴門教育大学

772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748

ryota@naruto-u.ac.jp

Relationships between the syntagmatic features of the utterance and the hearer's linguistic responses in the discourse

NAGATA Ryota

Naruto University of Education

Keywords

subordinate clause, main clause, hierarchical structure of sentences, backchannels

Abstract

The purpose of this paper is to make clear the relationships between the syntagmatic features of the utterance and the hearer's linguistic responses in the discourse. By observing the utterances of the complex sentences in the discourse, this paper reveals the following two points.

(I) Hearer's linguistic responses at the end of the main clause are different from those of the subordinate clause. Hearer's linguistic responses which presuppose sufficient information tend to occur at the end of the main clause than the subordinate clause.

(II) Hearer's linguistic responses at the end of the subordinate clause differ according to the degree of subordination. The stronger the independence of the subordinate clause becomes, the more backchannels which represent understanding and sympathy to the speaker tend to occur at the end of the clause.

These evidences show us that there are close relationships between the syntagmatic features of the utterance and the hearer's linguistic responses in the discourse.